

第Ⅲ部 松橋前田遺跡A地点出土埴輪の  
整理報告

## 第1章 位置と環境

松橋前田遺跡は、熊本県宇城市松橋町に所在する古墳時代の遺跡である。熊本県教育委員会が1966年3月に発行した『遺跡地名表』によれば、その所在地は下益城郡松橋町前田333番地となっている（熊本県教委1966：p.10）。それを現在の住所に直せば、宇城市松橋町松橋333番地となる。

しかし、1998年3月発行の最新の『熊本県遺跡地図』をみれば、遺跡の場所はその住所より若干北へ寄った位置となっている（熊本県教委1998：地図49）。

この違いはほんのわずかなものであるのかもしれないが、今回この報告を行うにあたり、松橋前田遺跡の位置を正確に知りたいと思った。なぜなら、後述するように松橋前田遺跡はすぐ近くの松橋大塚古墳へ樹立するための埴輪が前もって集められた場所である可能性が高く、そうした場合、古墳と遺跡、すなわち埴輪の供給先と集積地との位置関係がきわめて重要になると考えたからである。

松橋前田遺跡の発掘調査報告書は未刊行のままであるが、さいわい、1965年の調査時に作成された平板測量図が残されていた（図61）。そこで、それに記された畑の境界線や道路の位置を1974年撮影の空中写真（図56）と慎重に比較検討した。また、発掘調査を担当された伊藤奎二氏（当時、熊本大学法文学部助手）にもお話をうかがった。その結果、遺跡の位置は、1966年の『遺跡地名表』に示されたものが正しいという結論を得た。

これにしたがいあらためて記しておけば、松橋前田遺跡は、熊本県宇城市松橋町松橋333番地に所在する。

さて、その場所は八代海北東隅の沿岸部にあたる。遺跡は周囲よりも若干高い標高10～15m程度の低位段丘上に立地している（図56・57-1）。そこは、現在、近世以降の干拓によって海岸線から3km程離れているが、遺跡が形成された当時は海に小さく突出した台地であったと考えられる。おそらく、そこからは、南西方向に大きく広がる八代海を臨むことができたであろう。



図56 松橋前田遺跡の位置（黒丸の位置）と周辺の地形（実体視可能）

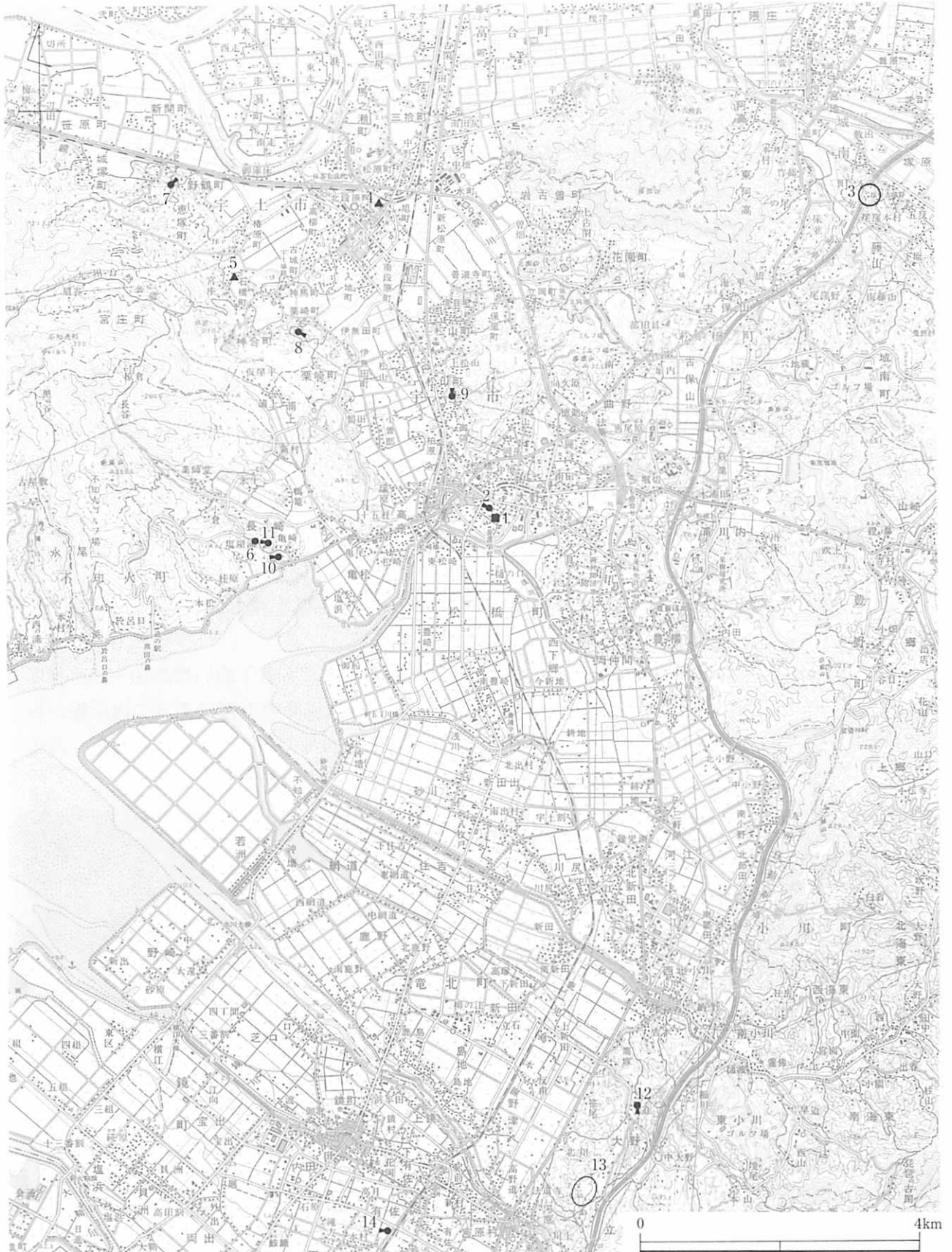


図57 松橋前田遺跡の位置

- 1 : 松橋前田遺跡, 2 : 松橋大塚古墳, 3 : 塚原古墳群, 4 : 石ノ瀬遺跡, 5 : 轟貝塚, 6 : 道免古墳, 7 : 天神山古墳  
8 : 城ノ越古墳, 9 : 向野田古墳, 10 : 弁天山古墳, 11 : 国越古墳, 12 : 大野窟古墳, 13 : 野津古墳群, 14 : 有佐大塚古墳



図58 松橋前田遺跡の現状 (2009年1月)



図59 松橋大塚古墳の現状 (2009年1月)

なお、上述の住所を頼りに現地に行ってみると、遺跡の場所は畑地として利用されていた(図58)。平板測量図に示された畑の境界線もかろうじて残されているようであった。周囲に住宅が建て込んでいることを考えると、奇跡に近いことであろう。

松橋前田遺跡の北西約120mには、松橋大塚古墳が存在する。前方部を北西に向ける前方後円墳で、墳長は79mとされる(三島1966:p.84, 富樫1978:p.146)(図59・60)。しかし、墳頂部や墳丘の周囲が大きく削平されているから、その本来の規模や形態を想定することは難しい。かつて古墳の周囲が発掘調査され多くの埴輪が検出されたが、報告書は未刊行である。ただし、熊本県教育委員会に所蔵されているその埴輪をみると、本書で報告する松橋前田遺跡A地点で検出されたものときわめてよく似ている。松橋大塚古墳は、松橋前田遺跡を評価するうえで欠くことのできない存在である。

ところで、松橋前田遺跡や松橋大塚古墳が存在するのは、宇土半島基部地域の幅狭い低地部を南へ抜けた地点である(図57)。宇土半島の基部を抜けるルートは、現在でもJR鹿児島本線や県道14号線(旧国道3号線)がそこを通過していることからわかるように、北の有明海側と南の八代海側を

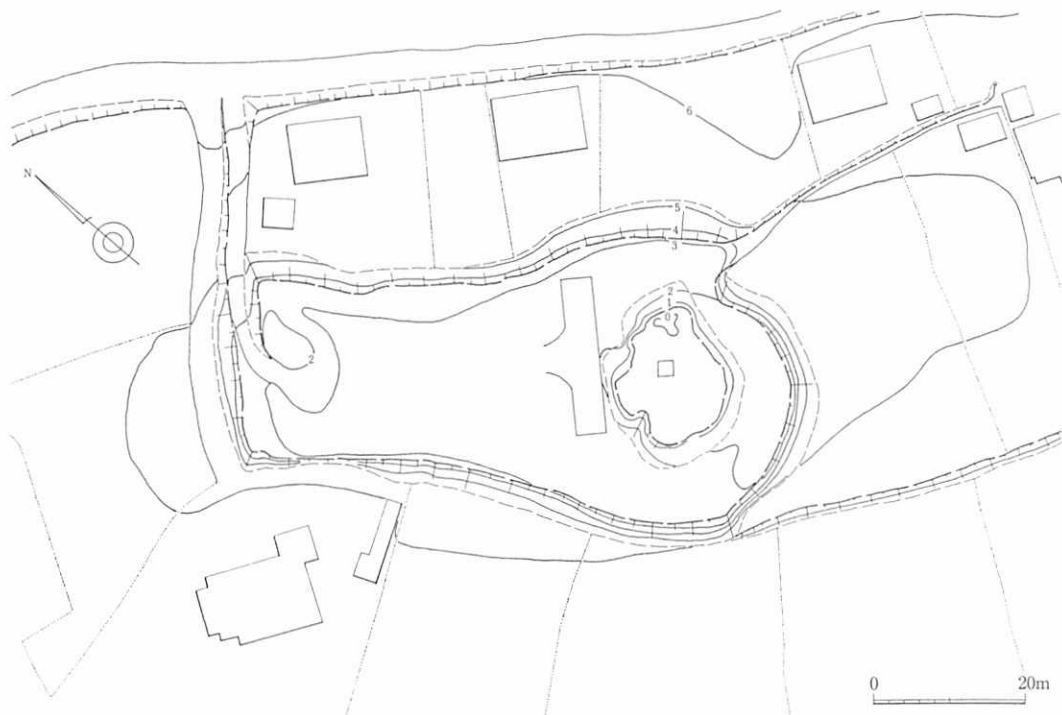


図60 松橋大塚古墳墳丘測量図

結ぶ陸路の要衝である。しかし、松橋前田遺跡と松橋大塚古墳の時期が古墳時代中期中葉から後葉と考えられることを念頭におけば、そこから北東へ向かい城南町塚原古墳群が存在する緑川中流域へと抜けるルートをより重視すべきであろう。今の国道266号線のルートである。

いずれにしろ、松橋前田遺跡と松橋大塚古墳は、八代海の九州島側を北へ上ってくるルートと有明海側から陸路を南へ下ってくるルート、そして、東から宇土半島南岸をつたってくるルートの結節点に位置している。こうした立地環境は、それら遺跡や古墳が営まれた意味を考察する際の重要な鍵となるであろう。

(杉井)

## 第2章 1965年の発掘調査概要

発掘調査時の実測図に記された日付によると、松橋前田遺跡の調査は1965年3月上旬に行われたことがわかる。調査を担当された伊藤奎二氏にうかがうと、地権者がみかん園造成のために地面を掘削していたところ埴輪が検出されたようで、その情報が伊藤氏にもたらされたので急遽現地に向かったという。そして伊藤氏や佐藤伸二氏らによって、遺物の取り上げが行われた。

調査は、みかん園造成地の2箇所にトレンチを設けて行われた。図61は残されていた平板測量図を図に起こしたものだが、西側にある長さ5m程度の不定形トレンチがA地点、東側の1×2m程度の長方形トレンチがB地点と考えられる。両トレンチ間の距離は約22mである。これらのうちA地点において、本書で報告する埴輪が検出された。

この調査にかんする報告書は刊行されていないが、いくつかの文献にその概要が記されている。調査当時の貴重な記録であるから、以下にそれらを引用しておこう。

まず1つ目は、第1章でも記した熊本県教育委員会発行の『遺跡地名表』である（熊本県教委1966）。そのなかに、新たに発見された遺跡として「松橋前田遺跡A・B」の名前がみえる。そして、その種別を「埴輪製造所？、遺物包含層（古墳・弥生）」とし、「松橋大塚古墳の南約120m、台地中央部にあり、果樹園造成中発見された。Aでは埴輪23ヶ体分出土、Bは弥生土師包含層である」と説明している（同文献：p.10）。おそらくこれは、松橋前田遺跡が文献に登場した最初であろう。

2つ目は、三島格による「肥後における古墳研究－戦後の成果と問題点－」と題した論文で、その

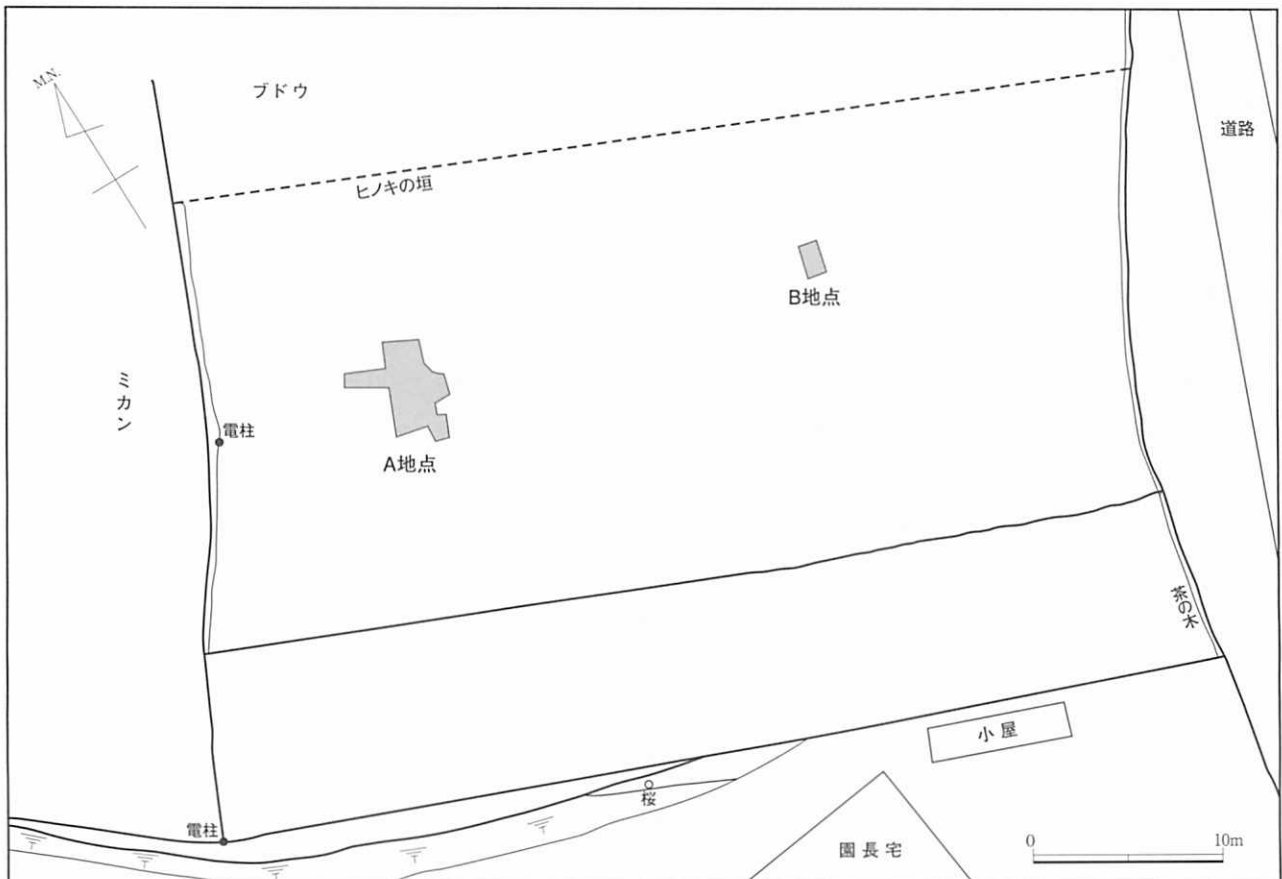


図61 松橋前田遺跡1965年調査時のトレンチ配置図

なかで、「昭和三十九年以降、予期されなかった地域において」発見された遺跡（三島1966：p. 87）として次のように紹介されている。

「松橋前田遺跡（下益城郡松橋町前田） 試掘の程度にすぎないが、円筒埴輪、朝顔形埴輪が多数横倒しになった状況がみられたが、窯である証左は今のところ発見されていない。なお、三十数米はなれた地点に土師器の堆積した包含層を認め両者は無縁とは考えられないようである。遺跡の性格を、もし工房跡などとすれば埴輪の移動先の追求など、県下ではじめての興味ある問題をはらんでいる。計二十二の埴輪を復原した結果、同じ窯印ごとの器形を見ると同一工人のものと思わせるくせがあるらしく、この点から窯印はいわゆる窯の印ではなく工人のマークではないかとの所見を伊藤奎二は得ている。」（同文献：p. 87）

3つ目は、調査者の1人である佐藤伸二氏によるものである（佐藤1970）。古式土師器の編年にかんする論文であるが、そのなかで松橋前田遺跡出土の土師器がとりあげられ、埴輪を含めた出土状況が説明された。以下に引用するが、調査担当者による記録としてきわめて重要である。

「前田遺跡（下益城郡松橋町） 平野に突出した台地上の遺跡で、土師器と埴輪が出土したA地点、弥生的な色彩の強い土師器が出土したB地点がある。この台地一帯からは縄文式土器、弥生式土器、須恵器などが発見される。」（同文献：p. 3）

「A地点 円筒埴輪、朝顔形埴輪、土師器が雑然と出土した。土師器、埴輪ともに完全なものはないが、破片は大きく互に接合できるので、後世攪乱されたとは考えにくい。土層からも攪乱を示すものは見出せなかった。したがって、土師器と埴輪は、同一時期のものと考えての方が自然であろう。ただ、縄文式土器や、焼成色調などから明らかにB地点出土の土師器と同じものが二・三片出土した。このことは、遺跡が攪乱されたことを示すものとも考えることもできる。しかし土層に攪乱の痕跡がないのであれば、B地点出土の土器がA地点出土の土器より古く存在したために、A地点に遺跡が形成された際、縄文式土器とともにまぎれこんだものとも考えることの方が自然である。後述のように、B地点の土器が弥生的な色彩を強く残した土師器である点からも、そう考える方が無理がない。」（同文献：pp. 3-4）。

「B地点 小さな窪地にできた厚さ三〇cm程の包含層で、多量の土器が木炭、灰とともに出土した。焼成中に生じた「焼ひび」としか考えられないものも出土した。包含層は長年月かかって堆積したようには思えない。住居跡の炉にしては、土器が多すぎる。土器を焼いた際の焼き損じを棄てたと見る方が、木炭や灰のありかたをよく説明できるように思う。そのことはともかくとしても、これらの土器を同時期と見ることは可能であろう。」（同文献：p. 6）

以上3つの文献の内容のうち重要であると思うのは、22～23個体分の埴輪が検出されたとされること、それらは土師器とともに雑然と出土したが後世に攪乱された状態ではなかったとされること、そして埴輪と土師器は同一時期のものであるとされることである。

埴輪の出土状況写真（図版46～50）をみると、破片となったものも多いが、ほぼ完形の状態で検出された埴輪も少なくないことがわかる。土師器はこのなかに少数混じっていたようだ。問題はその土師器と埴輪の関係であるが、それを今、明確に示すことはできない。ただ、佐藤氏によって示された土師器をみる限り、土師器の方が若干古いように思う（佐藤1970：p. 4）。今後、A地点における遺物の出土状況、およびそこで検出されたすべての土師器を検討する必要があるだろう。（杉井）

### 第3章 今回の整理作業に至る経緯とその経過

松橋前田遺跡A地点出土埴輪の整理作業は、1965年の調査後、発掘調査担当者の伊藤奎二氏によってかなりの程度行われていた。多くの埴輪が復元されその実測図も作成されていたし、また埴輪出土状況図の製図も行われていた。しかし、大学紛争の時期でもあり、また伊藤氏が熊本大学を離れることになって、そうした成果が報告書にまとめられることはなかった。

私（杉井）が熊本大学へ赴任したのは1998年4月であったが、その翌年、大学が所蔵するすべての埴輪を調査した。それは、熊本古墳研究会で県内出土埴輪の検討を行うことになったためであったが、同時に、それら埴輪を学生教育に役立てたいと考えたこともきっかけであった。そして、松橋前田遺跡A地点出土埴輪を整理作業の対象に選択した。それは、未報告資料であること、完形に近い状態にまで復元できるものが多いこと、そのため形態や製作技法の特徴をとらえやすく学生教育にとっては最適の資料であると考えたことなどが理由であった。また、当時、学部3年生であった竹中克繁君が埴輪をテーマとして卒業論文に取り組もうとしていたことも理由の1つであった。

そこで、1999年11月に発掘調査担当者の伊藤奎二氏および佐藤伸二氏から整理作業を行うことの許可を得た。そして、長期の保管のあいだに付着したほこりを洗い落とし、すべての破片に注記を行った。しかし、整理作業はここまで進んだ段階で行き詰まることとなった。熊本大学文学部考古学研究室では毎年の実習発掘調査にかかわる整理作業と報告書の作成をその年度のあいだに行うことを実践しているが、それに加えてかつての調査資料を整理することは、時間的にもまた人材的にもきわめて困難であったのである。やはり、研究室全体で取り組む課題に位置付けなければ、果たし得ないこと



図62 熊本大学に所蔵されている未報告の松橋前田遺跡A地点出土埴輪





図63 宇城市立松橋郷土資料館に展示されている埴輪

であった。そのため、破片の接合や実測などは竹中君1人の頑張りで何とか継続されるという状態となり、彼が大学を去ると同時に整理作業は完全に中断してしまった。

整理作業の実施を志してから7年目の2006年、本共同研究を開始した。当初は、第Ⅱ部で報告した上天草市カミノハナ古墳群出土遺物のみを念頭

においていたが、それとほぼ同時期である松橋前田遺跡A地点出土埴輪を調査対象資料に加えれば、八代海沿岸地域における中期古墳の動向を広域的にとらえるうえできわめて有益であると考えた。そこで、かつてその整理作業に携わっていた竹中君に事情を説明し、本共同研究のテーマの1つとしたのである。

しかし、大学に保管されているすべての埴輪片を対象に整理作業を実施することは、時間的に不可能であった。そこで、以前に伊藤奎二氏によって復元されていた埴輪を中心に報告することを決定した。完全を目指すことよりも、まったくの未報告状態から脱却することを優先したのである。

上述したように、かつての文献には22~23個体分の埴輪が出土したと記されているから、それをもとに数えると、今回報告できたのは全体の半数にも満たない。熊本大学には、木箱に収納されたままの未報告資料がまだ多数存在する(図62)。また、宇城市立松橋郷土資料館のロビーには、完形に復元された2個体の当遺跡出土埴輪が展示されているが(図63)、それらについても今回報告することができなかった。さらに、伊藤奎二氏から提供を受けたかつての調査資料のうち、埴輪出土状況図については、十分な分析を行うことができなかったため、今回の報告に掲載することを断念した。

こうした不十分なところは多々あるが、たとえ今できる範囲までであったとしても資料を公開することの方が重要であると考え。40数年前に検出された資料が、今、ようやく日の目をみることになったのである。

今後、不足の点については、何らかのかたちで補っていきたいと考えている。

(杉井)

## 第4章 出土埴輪の整理報告

普通円筒と朝顔形円筒の2種が存在する(図版26)。形象の出土はない。総じて器壁は厚く、底部がやや内湾するものがあるが、普通円筒、朝顔形円筒ともに、底部から口縁部(ないし肩部)までほぼ垂直に、直線的に立ち上がる。突帯突出度は極めて高い。今回図化しえなかった資料中に、1個体のみ、薄い黒斑が認められるものがあるが、ほとんどの個体は芯まできれいに焼き上がり、窖窯焼成によるものとみて間違いない。外面二次調整ヨコハケは認められないものの、全体のプロポーションや突帯突出度、焼成状態から、古墳時代中期の中葉から後葉、川西編年Ⅳ期に比定される。今回報告するのは、一定程度に接合復原を成した10個体である(図64~71)。以下に詳述する。

1は普通円筒口縁部片で、やや外傾気味に、直線的に立ち上がる(図64, 図版35)。径は復原で31.0cm、口縁部段の高さは11.8cmである。突帯は突出度の高い断面台形状で、突帯と口縁部段の一部に、器壁とは異なる白色の粘土を用い、赤白のコントラストを成している。口縁部直下段に円形透孔

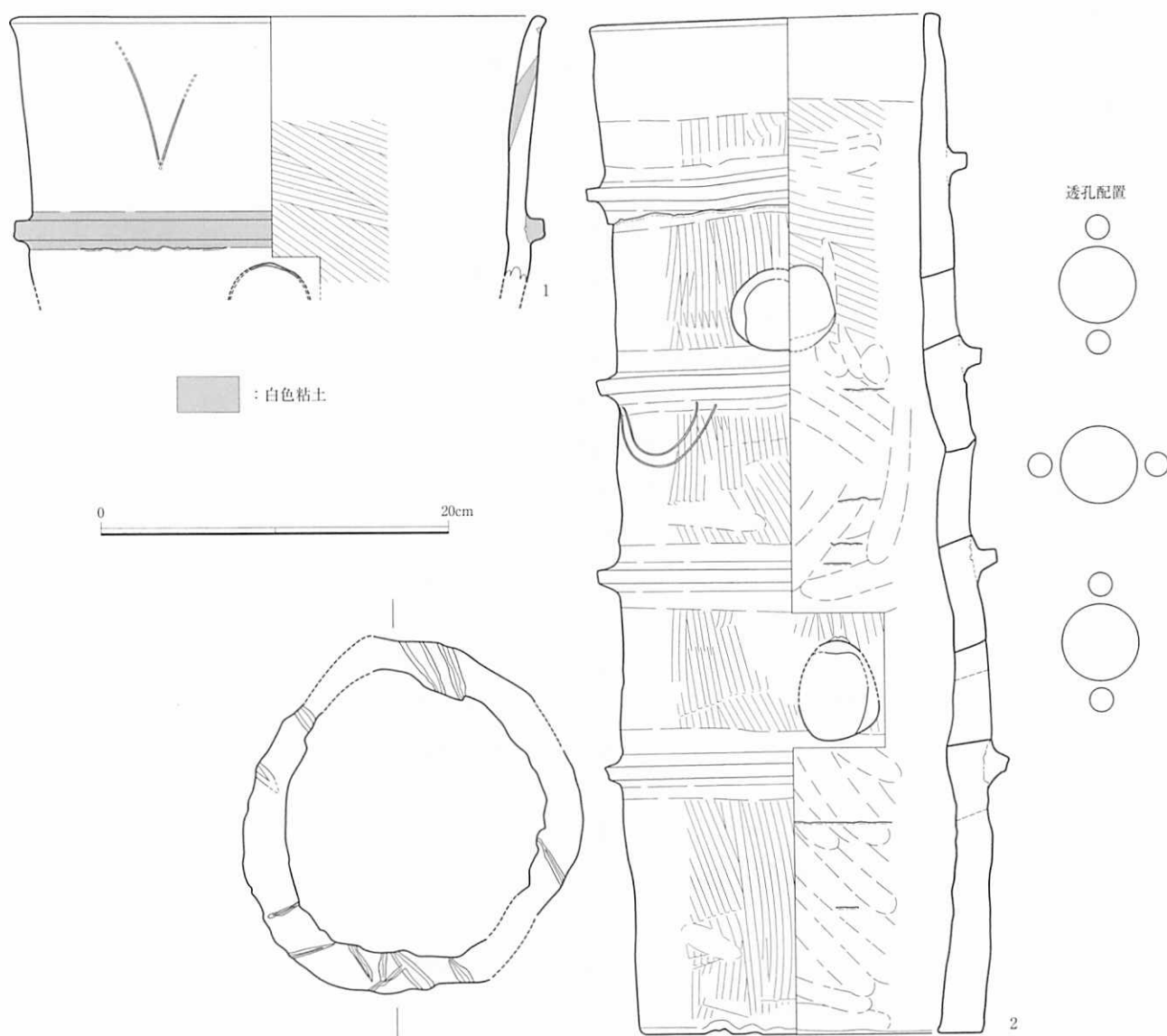


図64 松橋前田遺跡A地点出土円筒埴輪実測図(1)

の一部が残る。口縁部段の外面に弧状の沈線が施される。外面は横ナデによって平滑に仕上げられ、内面は3条/cmの、やや目の疎らなナナメハケの上から、ナデを施す。

2は突帯4条5段構成の普通円筒である(図64, 図版27)。口径20.6cm、底径20.2cm、全高59.3cmで、本遺跡出土の円筒埴輪のなかでは、やや小型である。各段の高さは底部15.9cm(以下、突帯上辺を基準とした計測値)、2段目11.3cm、3段目11.1cm、4段目は突帯の歪みにより11.0~11.4cm、口縁部段も同じ理由により8.0~9.5cmとやや幅があるが、胴部段は整合性が高い。口縁端部の形状は断面台形状、突帯も突出度の高い断面台形状である。胴部各段に2方向、段違い直交で円形透孔が配置される。外面から内面に向かって、やや上の位置から穿孔されたようである。3段目の外面には、上辺の突帯に接して、刀子状の工具により、二重半円の線刻が施される。突帯の剥落した器面には、二条の凹線による突帯設定技法が観察できる。外面調整は3条/cmの、やや目の疎らな一次調整タテハケにより、口縁部段上半は、その上から横ナデを施す。内面調整は3段目以下は指ナデで、4段目以上はナナメハケ、横ナデで、口縁部段はハケの上から、外面と対応する形でナデが入る。

3は二重口縁朝顔形円筒の第2口縁部である(図65, 図版36の1段目)。有段部において第1口縁とは角度を変えて立ち上がり、口縁上部においてやや外反する。外面は3条/cmのハケの上から全面にナデ調整を施して平滑に整え、さらに全面赤彩を施す。第1口縁との境にあたる破片下面には、第1口縁と第2口縁の接着を助長するために第1口縁に施されていた刻みに圧着した痕跡が凸状に残る。

4は胴部4段構成の朝顔形円筒であるが、口縁部は完全に欠損している(図65, 図版28)。各段の高さは底部17.6cm、2段目11.6cm、3・4・5段目10.4cm、肩部14.8cmである。突帯は断面台形状で、横面がやや窪み、下辺が突出する。胴部には一段につき2方向、段違い直交で円形透孔が配置され、肩部には4方向、円形と三角形の透孔がそれぞれ対向位置に配置される。肩部外面に、辺が弧状の星形と、2辺が弧状の三角形の、線刻2種が施される(図版38-7・8)。後述の6・8にも類似の弧状三角形の意匠が認められるが、本個体のものとは上下が逆転している。外面調整は3条/cmのタテハケであるが、2種の原体が認められ、1・4・5段目の一部に用いられるものは櫛がやや太く、線刻状のハケメとなっている。また5段目および肩部は、上から軽度のナデ消しが入る。内面調整はナナメハケを基調とし、3・4段目、および肩部はナデである。

5は底部から4段目の一部までが残存する(図66, 図版29)。器種は不明であるが、径が他の朝顔形円筒と近似しており、朝顔形円筒である可能性が高い。各段の高さは底部16.9cm、2段目11.4cm、3段目12.2cmである。突帯は断面台形状で、横面がやや窪む。4と同じく、胴部各段に2方向、段違い直交で円形透孔が配置される。底部から3段目まで、外面に計8種の線刻が認められる。うち2段目に施される多重「へ」の字状のものは細い棒状の工具で明瞭に施されているが、他のものはいずれも極めて細い線で施され、不明瞭である。また2段目には2の普通円筒と類似する二重半円の意匠が認められるが、上下が反転している。外面調整はタテハケで、全体的に軽度のナデ消しが入る。内面調整は、底部および2・4段目はナナメハケ、3段目はナデである。

6は胴部4段構成の二重口縁朝顔形円筒である(図67, 図版30)。第2口縁は完全に剥落しているが、第1口縁内面の端部付近には第2口縁の剥落した痕があり、口唇近くには第2口縁との接着を助長するための刻みが施される(図版38-1)。残存する第1口縁端部までの全高87.8cm、各段の高さは底部15.6cm、2段目11.6cm、3段目10.8cm、4段目9.4cm、5段目12.8cm、肩部16.8cm、第1口縁部10.4cmで、胴部各段の高さはやや不揃いである。突帯は横面がやや窪む断面台形状で、場所によってやや歪みながら巡る。2・4段目に1方向、3・5段目および肩部に3方向、透孔を穿孔する。ほ

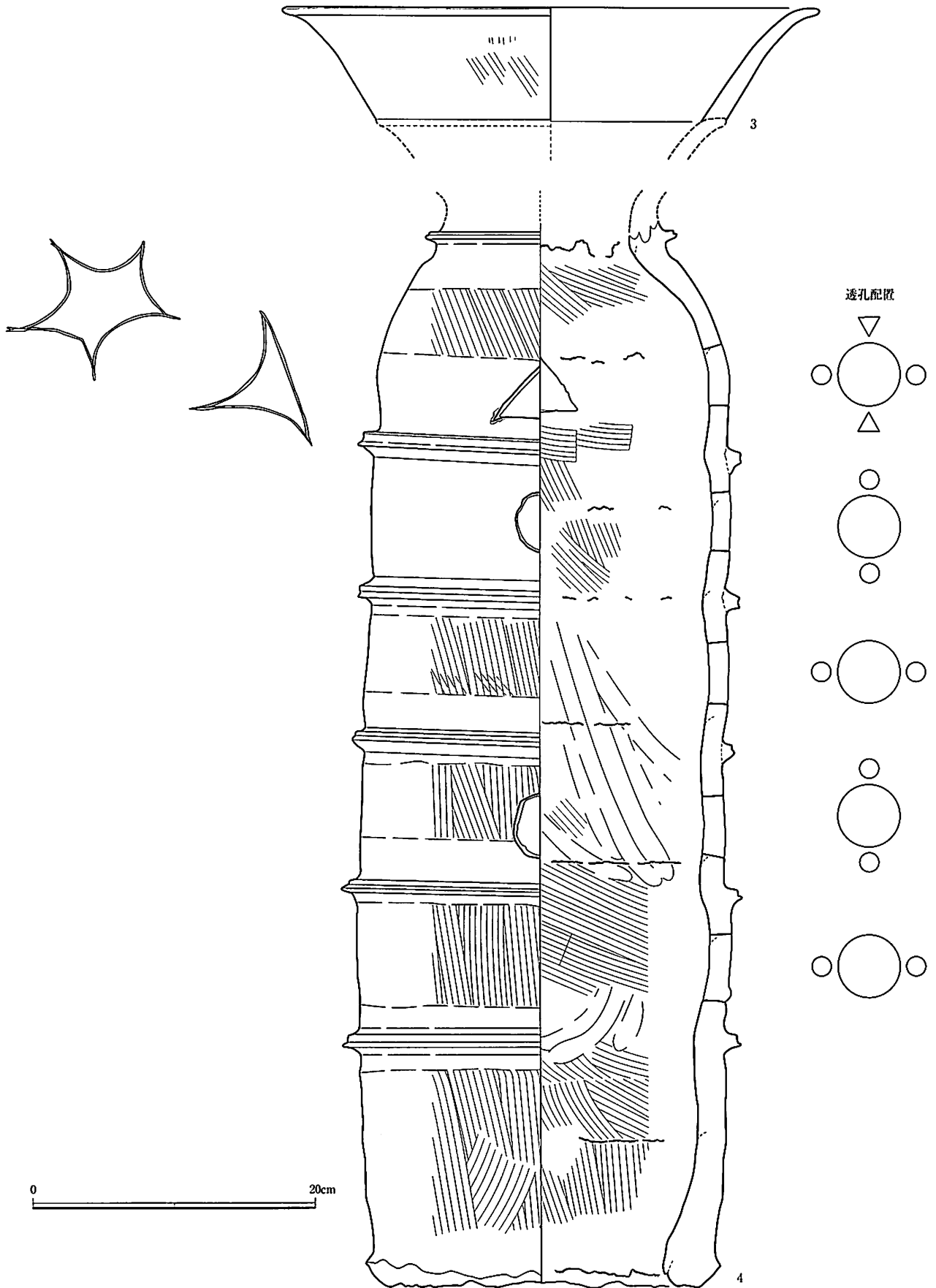


图65 松橋前田遺跡A地点出土円筒埴輪実測図(2)

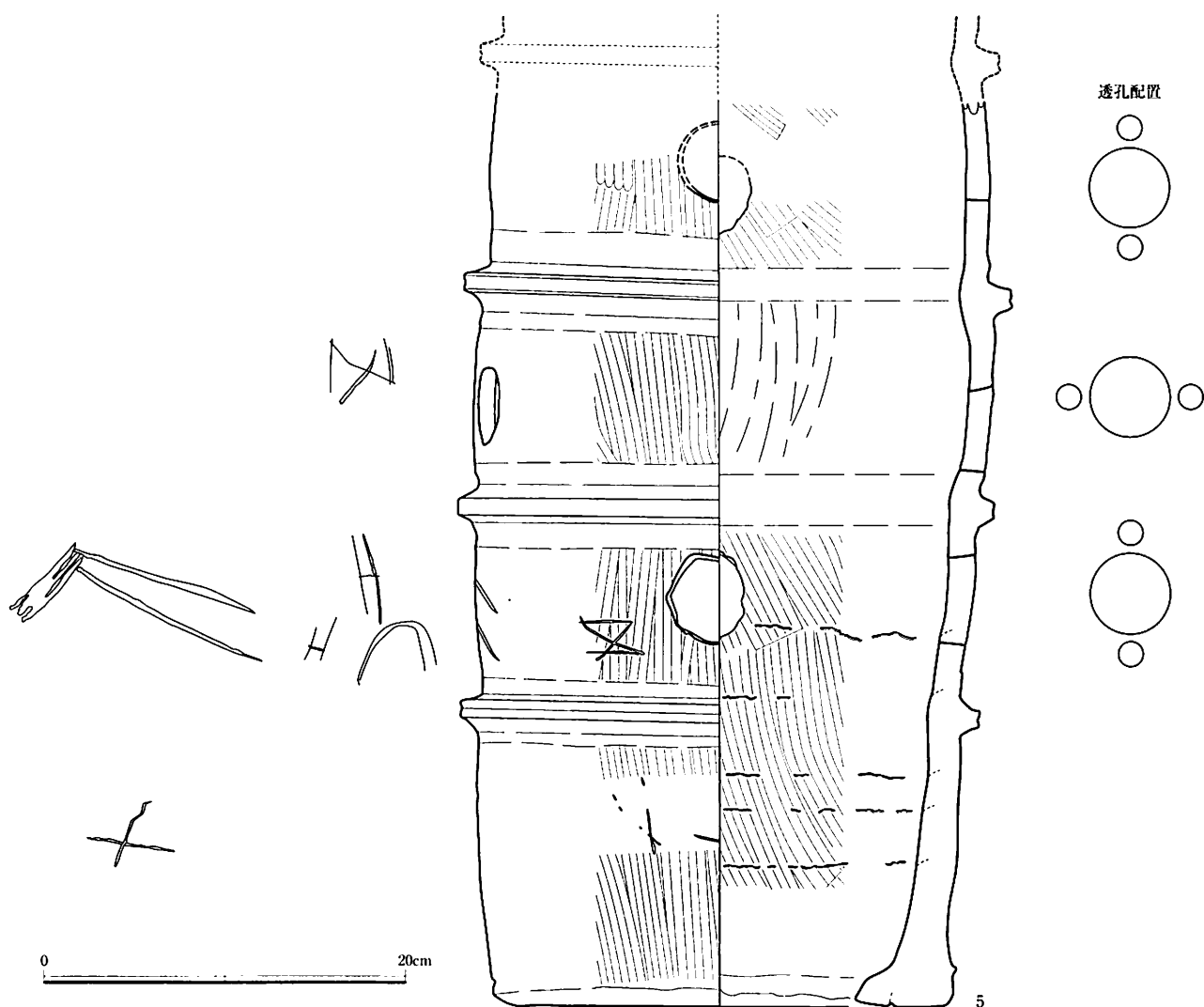


図66 松橋前田遺跡A地点出土円筒埴輪実測図(3)

とんどは円形であるが、肩部において1方向、三角形の透孔が穿たれる。肩部の外面に2種の線刻が施され、うち弧状三角形の意匠は、8と共通する。外面調整は3条/cmのやや斜位のタテハケを基調としているが、先述の4同様、2種の原体が用いられており、2段目および肩部に線刻状のハケメが認められる。またハケメの傾きは左上⇄右下であるが、5段目は左上⇄右下のハケメの上から右上⇄左下のハケメが施され、さらにその上からナデ消されている。肩部のハケメはナデが施されることなくそのまま残っており、第1口縁部のハケメはナデ消されている。内面調整は、底部および2・4段目はナデ、3段目は横位のハケの上からナデ、5段目および肩部は横位のナナメハケメがそのまま残り、口縁部は横位のハケである。

7は胴部4段構成の朝顔形円筒であるが、口縁部は完全に欠損している(図68, 図版31)。各段の高さは底部15.8cm、2・3段目11.6cm、4段目11.2cm、5段目12.2cmで、胴部の高さは整合性が高い。突帯は断面台形状で、横面がやや窪む。6と同じく、2・4段目1方向、3・5段目に3方向、円形の透孔が穿孔される。肩部には現状で三角形透孔が1方向穿孔されるが、対向位置に、穿孔途中で穿たれることのなかった三角形透孔の痕跡が残る(図版38-3)。また肩部の透孔は、他段とはずらし

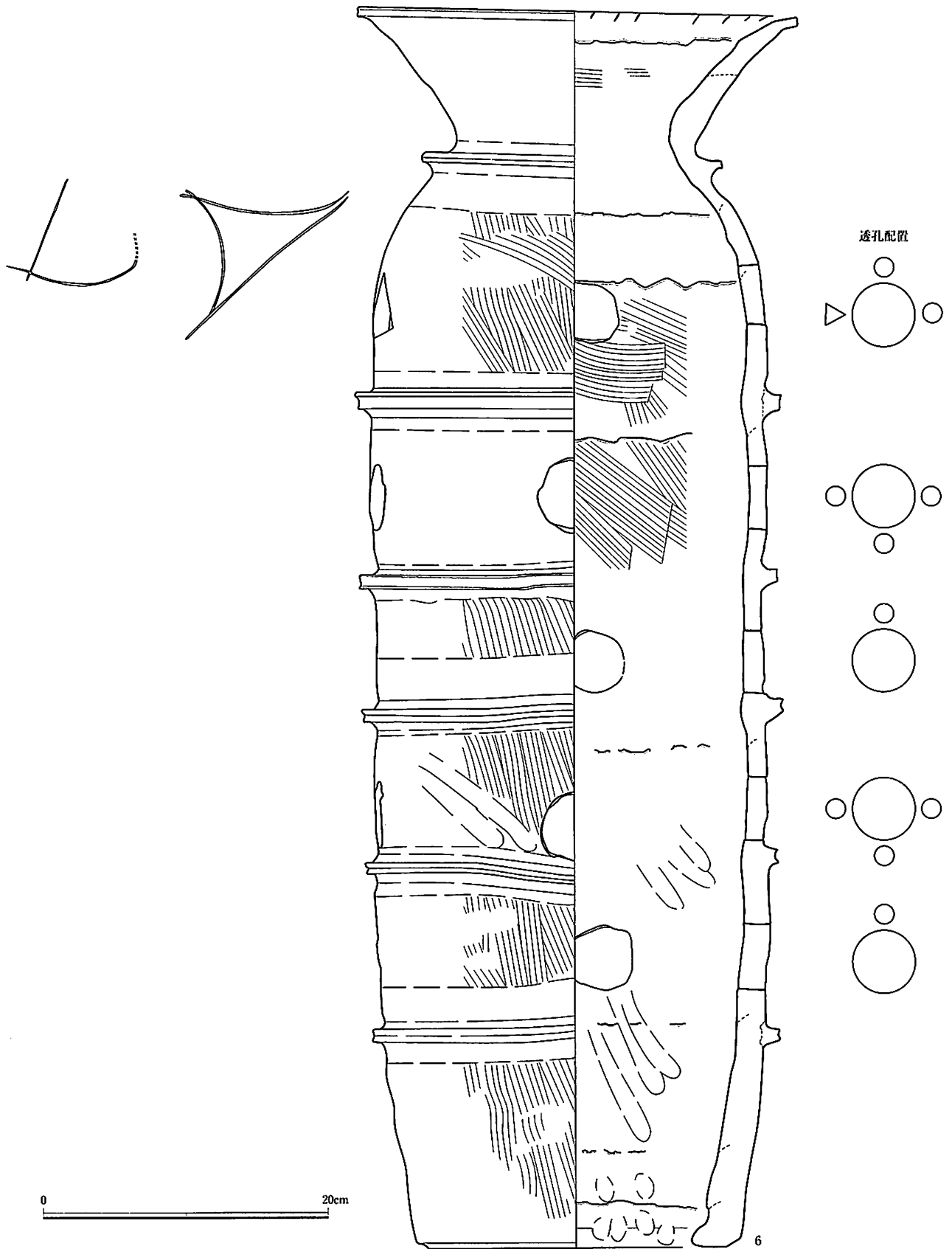


図67 松橋前田遺跡A地点出土円筒埴輪実測図(4)

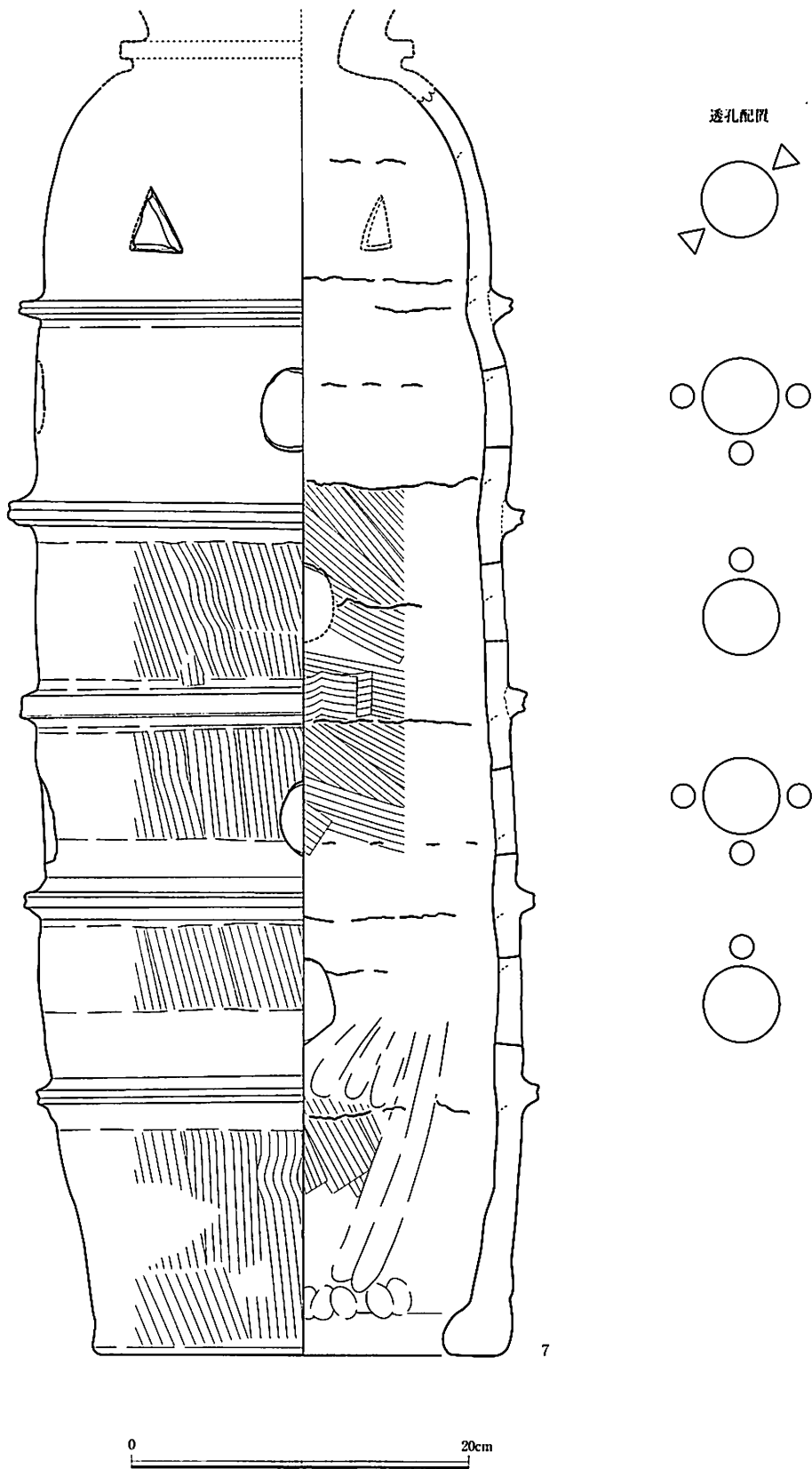


図68 松橋前田遺跡A地点出土円筒埴輪実測図(5)

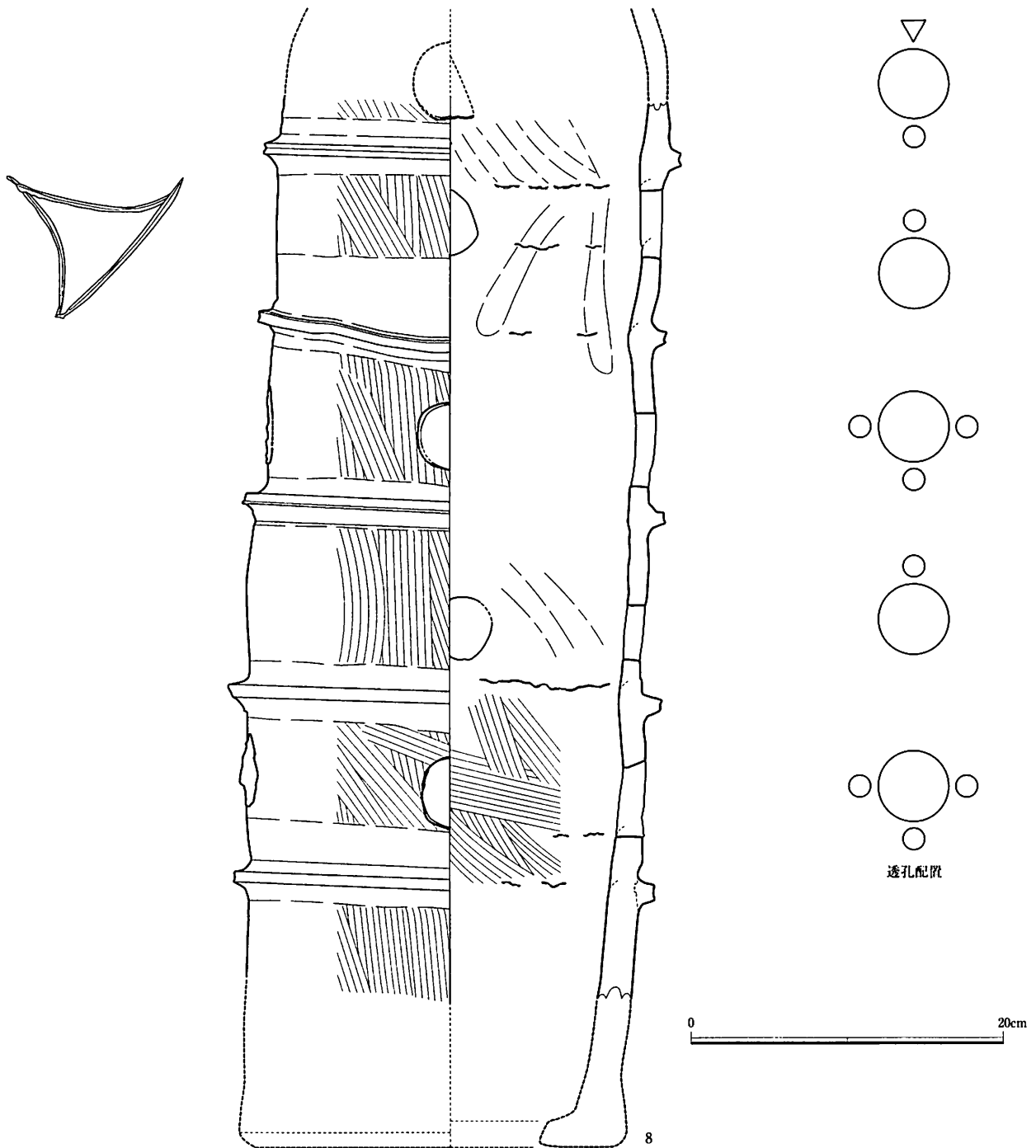


図69 松橋前田遺跡A地点出土円筒埴輪実測図(6)

て配置されている。線刻は認められないが、肩部外面の全面に赤彩が施される。外面調整は3条/cmのタテハケであるが、4・6と同じく2種の原体が用いられ、4段目は線刻状のハケメとなっている。上下の段に連続性はなく、5段目と肩部は、上から軽度のナデ消しが入る。内面は、底部はナナメハケの上からナデを施し、3・4段目はナナメハケがそのまま残る。

8は段数から朝顔形円筒と思われるが、底部下半および肩部以上を欠損する(図69, 図版32)。各段の高さは2段目11.8cm、3段目12.0cm、4段目は突帯の歪みが大きく10.6~11.6cmと幅があり、5段目も同じ理由により11.2~12.4cmである。突帯は断面台形状で、横面がやや窪む。透孔は6・7と同じく1段につき1方向と3方向の円形透孔が交互に配置されるが、前2者と異なり、2・4段目が



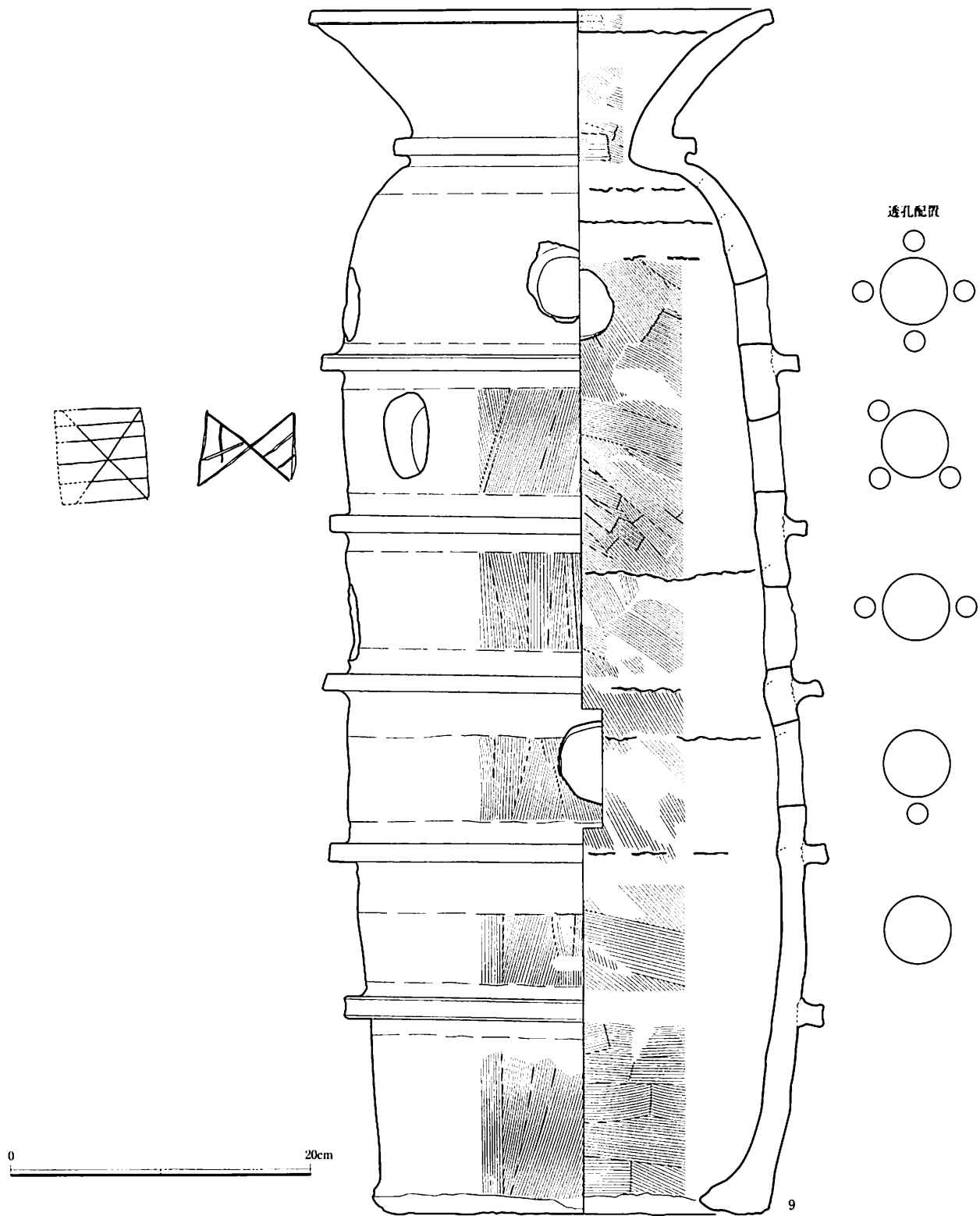


図70 松橋前田遺跡A地点出土円筒埴輪実測図（7）

3方向、3・5段目が1方向となっている。また肩部には現状で2方向の透孔の痕跡があり、円形と三角形の透孔が対向位置で配置されている。5段目外面に、6と同じ2辺が弧状の三角形の線刻が施されている。外面調整は3条/cmのタテハケであるが、所々、その上から、突帯貼り付け前にナナメハケが施される。内面調整は、2段目はナナメハケや横位のハケが施され、他の段はナデである。

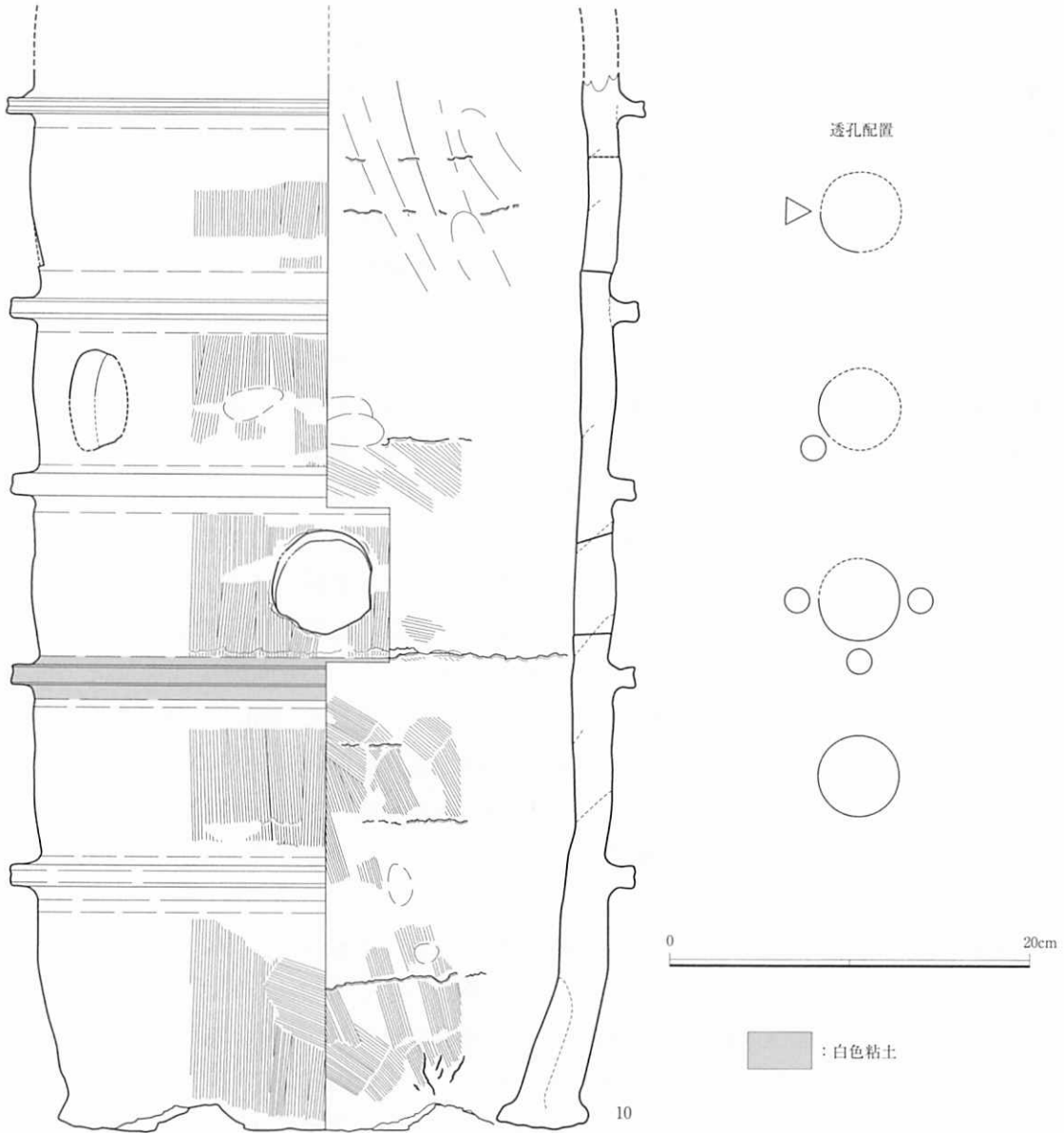


図71 松橋前田遺跡A地点出土円筒埴輪実測図（8）

9は胴部4段構成の二重口縁朝顔形円筒である（図70，図版33）。第2口縁は完全に剥落しているが、第1口縁内面の端部付近には第2口縁の剥落した痕がある。残存する第1口縁端部までの全高81.2cm、各段の高さは底部14.4cm、2段目10.4cm、3段目11.2cm、4・5段目10.8cm、肩部14.8cm、第1口縁部10.0cmで、胴部の高さは整合性が高い。他の朝顔形円筒の個体と比べて、径がやや大きく、底部、胴部、肩部、口縁部の高さが低いため、やや横に大きな印象を受ける。突帯は断面長方形状で、極めて突出度が高い。胴部と肩部に円形透孔を、3段目に1方向、4段目に2方向、5段目に3方向、肩部に4方向穿孔するが、2段目にはない。また3・4段目および肩部の透孔は直交に配置されるが、5段目の透孔は、他段とはずらして配置されている。5段目の外面に2種の線刻が刀子状の工具により施される。外面調整は7条/cmの目の細かなタテハケで、上下の段で連続性はない。ハケメの切り合いをみると、左⇒右の順で施されている。肩部はナナメハケを上からナデ消し、口縁部は丁寧なナデで平滑に仕上げている。内面は底部から口縁部まで全面ハケで、底部は横位の断続的なハケ、それ

以上はナナメハケである。

10は底部から第5突帯までが残存する(図71, 図版34)。5段目よりさらに上に続くことや、径が他の朝顔形円筒と近似することから、朝顔形円筒である可能性が高い。各段の高さは底部14.8cm、2段目11.0cm、3段目10.6cmで、先述の9と近似した値を示す。突帯は断面長形状で、極めて突出度が高い。第2突帯は1と同じく器壁と異なる白色の粘土で成形され、赤白のコントラストを成している。透孔は2段目には無く、3段目に円形透孔が現状で3方向、4段目にも現状で1方向確認でき、また5段目には三角形透孔が現状で1方向確認できる。外面調整は7条/cmの非常に目の細かなタテハケで、上下の段に連続性はない。ハケメの切り合いをみると、左⇒右の順で施されている。内面調整は右下⇨左上のナナメハケで、外面調整と同じ工具により、断続的に施されている。

**松橋前田遺跡A地点出土円筒埴輪の特徴** 以上の本遺跡出土の円筒埴輪は、透孔のあり方に大きな特徴がある。透孔の形状では、円形を基調としながらも、肩部の一部に三角形を配置するもの(4・6・7・8)や、胴部の一部に三角形を配置するもの(10)があり、一部に三角形を配置するものが多い。完全に円形透孔のみで構成されているのは普通円筒の2と朝顔形円筒の9の2個体のみである。透孔の配置については、普通円筒の完形品である2は各段2方向、段違い直交配置となっているが、朝顔形円筒では多種のヴァリエーションがみられる。配置が明確なものでは、胴部各段2方向、段違い直交配置のもの(4・5)、胴部に段違いで1方向と3方向の透孔を交互に配置するもの(6・7・8)、2段目に透孔を配置せず、3段目1方向、4段目2方向、5段目3方向、肩部4方向と1段毎に透孔が増えていくもの(9)の3種に大別でき、肩部の透孔配置が明確な4・6・9では、3方向配置(6)と4方向配置(4・9)の2種が認められる。また7の肩部、9の5段目、10の4段目では、他段とは軸を45°ずらして配置されている。冒頭に触れたように、本遺跡出土埴輪は窖窯焼成による川西編年Ⅳ期の所産であり、円形透孔を各段2方向で段違い直交ないし隔段直交に配置することが通有な当該期にあつては、上述の本遺跡出土埴輪の透孔のあり方は、やや特異と言える。

成形の規格については、突帯の剥落した器面に1条ないし2条の沈線による突帯設定技法の施工が認められ、普通円筒、朝顔形円筒ともに胴部各段の高さは概ね11cm前後に揃えられている。底部の高さにはややばらつきがあるが、高17.0cm前後(4・5)、15.5cm前後(6・7)、14.5cm前後(9・10)の3種に大別できる。うち底部高14.5cm前後の9・10は、調整に用いられるハケが7条/cmの目の細かなもので、目の粗いハケを用いる他の個体とは異なり、径においても胴部で概ね30~32cmで、25~28cmで揃う他の個体よりもやや大きめである。また底部高17.0cm前後の4・5と、15.5cm前後の6・7では、先述の透孔の配置において、前者が胴部各段2方向、段違い直交配置、後者が段違い1方向・3方向の交互配置に対応しており、この3者の別が、そのまま製作者の別を表している可能性が高い。

(竹中)

## 第5章 ま と め

松橋前田遺跡は、古墳ではない場所から、20数個体分もの埴輪を出土した特異な遺跡である（図版46～50）。本遺跡出土の埴輪は、川西編年Ⅳ期、さらに詳細に言えば須恵器TK208～23型式段階（本書第Ⅳ部竹中論文参照）に比定され、本遺跡より北西120mの位置にある松橋大塚古墳との強い関連性をうかがわせる。

熊本県教育委員会が収蔵している松橋大塚古墳の埴輪には、突帯4条5段構成の普通円筒で、3段目の外面、第3突帯の直下に二重半円の線刻を持つ、本遺跡出土の普通円筒（図64-2）と瓜二つの個体がある。全体のプロポーシオンや突帯形状、調整なども共通しており、一部属性の共通・類似というレベルではなく、同一人の手によると思われる、完全な同工品である。その他、松橋大塚古墳出土の資料中には、松橋前田遺跡出土のものと同様の埴輪があれば、突帯形状や器厚、色調などから、本遺跡にはみられないものもあるが、松橋前田遺跡の埴輪が、「松橋大塚古墳の埴輪」であることは間違いない。

本遺跡の位置する熊本県の南半部、八代海沿岸地域において埴輪を有する古墳には、野焼き焼成段階に宇土市向野田古墳、八代市有佐大塚古墳があり、竈窯焼成導入後、本遺跡と同じく川西編年Ⅳ期段階には城南町琵琶塚古墳、上天草市カミノハナ1号墳、宇土市石ノ瀬遺跡が、川西編年Ⅴ期段階には宇城市国越古墳、同塚原平古墳、氷川町姫ノ城古墳、同中ノ城古墳、同端ノ城古墳、八代市八代大塚古墳などがある。とくに、当地域における竈窯焼成埴輪の最初期段階と思われる琵琶塚古墳の埴輪は、三角形透孔や各段における3方向以上の透孔配置、朝顔形円筒肩部への穿孔、突出度が高く鐮状になる突帯など、本遺跡出土の埴輪と共通する要素が多々あり、松橋前田遺跡の埴輪が、当地域において連綿と受け継がれてきた埴輪生産、埴輪祭祀の伝統の上に成立していることを示している。無論、地域における埴輪生産の伝統とは、他地域からの影響を受け付けない排他的なものという意味ではなく、石ノ瀬遺跡における外面B種ヨコハケの採用や、本遺跡出土の埴輪にもみられる沈線による突帯設定技法など、地域内では発生し得ない、他地域からの技術伝播や影響も含む。

本遺跡出土の埴輪に見られる、技術交流を示す要素の1つに、器壁とは異なる色調の胎土を用いた突帯がある。1・10は突帯に白色に近い色調の粘土を用い、器壁の黄褐色と明瞭なコントラストを成しているが、同様の個体は、本遺跡と同じ宇城市に所在する道免古墳や、県北の荒尾市三ノ宮古墳、和水町江田船山古墳にも認められる。これらはいずれも本遺跡と同じく須恵器TK208型式ないしTK23型式並行段階に位置付けられ、当該段階における情報伝播の1つの証左と言える。

また本遺跡の埴輪にみられる他地域からの技術伝播の要素として、加藤一郎は突帯設定技法の存在とともに、本遺跡の埴輪に複数認められる外面線刻のうち、曲線による三角形の意匠（4・6・8）に着目し、同様の「銀杏葉紋」は福岡県月岡古墳の埴輪においても確認でき、「琵琶塚古墳にみられるような在地の埴輪づくりの系統に、筑後川流域における埴輪生産の情報がもたらされたもの」である可能性を指摘している（加藤2008：p.237）。ただし、月岡古墳の埴輪において、加藤が指摘する「銀杏葉紋」と思しき線刻は、曲線から成る二重の三角形の意匠を複数、胴部を一周するように配置し、優れて装飾的である。月岡古墳の埴輪にみられる外面線刻には、他にも透孔を中心に二重、三重の同心円を描くものなどがあり、多分に装飾的な要素が強い。一方、本遺跡出土の埴輪にみられる線刻は、装飾文様というよりも、製作者の別を表したヘラ記号かと思しきふしがある。前章において、

成形規格の別と透孔配置の別が対応する可能性を指摘したが、透孔配置が共通する6と8は、ともに先述の曲線による三角形の意匠を持つ。類似の意匠は成形規格、透孔配置が異なる4にも見られるが、意匠の上下が反転しており、厳密に同じものではない。また今回報告した10個体において14種もの線刻が認められ、その組み合わせや施工位置に規則性が見出し難いことも、装飾的な性格よりも、製作集団や、工人の別を表出した機能的なものかと思わせる要素である。

筑後川流域からの影響を認めるか否かは別にしても、当地域の埴輪生産は、地域内の伝統と地域外からの影響を、その都度、組み合わせて成立、展開していったと考えられ、その一環として、本遺跡の「松橋大塚古墳の埴輪」があると言える。

では、「松橋大塚古墳の埴輪」を持つ松橋前田遺跡とは、そもそも何であろうか。15m程度のトレンチにおいて、完形に近いものを含む20数個体分の埴輪が出土した本遺跡の性格については、第2章に触れたように、これまで「埴輪製作地」の可能性が指摘されてきた。ただし、本遺跡における窯その他の遺構の存在は不明であり、この埴輪を出土したトレンチそのものの性格も、明確ではない。調査時の写真（図版46～50）をみる限りでは単なる包含層とも思えず、何らかの土坑か大型の溝状遺構だったのではないかと考えられる。

あらためて言うまでもなく、本遺跡の埴輪は、古墳出土のものとは何ら変わるところのない、焼き上げられた完成品であり、製作途上にあったことを示す兆候は何もない。また埴輪は、棺や井戸枠への転用など、古墳築造時や後世における二次使用の例が認められる遺物であるが、本遺跡の埴輪は完形に近く破損が少ないことや、表面の摩滅がほとんど見られないことから、墳丘樹立を経ていない未使用の段階にあり、二次使用に供するために抜き取ったものとは考えにくい。したがって本遺跡の埴輪は、埴輪の製作から使用に至る、成形・焼成・樹立の3段階のうち、焼成と樹立の間の状態にあると言える。そのような埴輪を持つ本遺跡の性格としては、埴輪製作工房（における焼成直後の集積や廃棄）と、墳丘樹立のための集積地という2つの可能性が考えられる。

本遺跡は標高10～15mの台地上平坦面の南東寄りに立地し、同じ台地上の松橋大塚古墳からは南東120mほどの位置にあたる。現在、一帯は住宅密集地となっており、当然、当時より大なり小なり地形が改変されていることとは思うが、少なくとも、現況では、窖窯を構築するに適した斜面や迫などは見当たらない。埴輪製作工房であれば、当然、窯も近接するはずであるが、立地として、その可能性は低い。松橋前田遺跡、松橋大塚古墳周辺で、地形的に窖窯を構築するに適しているのは、本遺跡より松橋大塚古墳を挟んで北1kmに位置する、岡岳という丘陵である。岡岳は最高点標高90mの南北に伸びる独立丘陵で、尾根上には彩色装飾古墳の宇賀岳古墳がある。多数の迫、尾根が発達しており、地形的には窖窯を構築するに適している。無論、現在までに窯は未発見ではあるが、丘陵周辺には多数の池（現況では、多くは溜池）が存在し、燃料はもとより、埴輪の原料たる粘土採取の利便性も考えられる。山裾から松橋大塚古墳までは900mほどの距離で、けっして近接しているとは言いが、大阪府新池埴輪窯なども、その供給先である太田茶白山古墳、今城塚古墳から、それぞれ1kmほどの距離にあり、埴輪製作の場とその消費地である古墳との距離関係として、不自然ではない。ただし、この丘陵に窯場を求めるとすれば、成形を行う工房もそれに近接していたはずであるから、1kmもの隔たりがある松橋前田遺跡は埴輪製作工房ではなく、墳丘樹立のために、製作地より埴輪が搬入されて集積された場所、いわば古墳築造のための資材置き場のようなものであった可能性が高いということになる。窯場より松橋大塚古墳を挟んでさらに遠くを集積地としたことがやや不自然ではあるが、松橋前田遺跡は松橋大塚古墳とともに乗る低位段丘の南端に位置しており、松橋大塚古墳と台地際と

の間の空隙地として、作業空間に選ばれたとも考えられる。

では、本遺跡出土の埴輪は、古墳のそばまで運ばれながら、なぜ墳丘に樹立されることなく終わったのであろうか。その理由を示す要素として、本遺跡出土の埴輪に、不完全なものが多いことが挙げられる。今回報告した朝顔形円筒は、いずれも二重口縁の第2口縁が欠損している。また、穿孔途中の透孔（図68-7、図版38-3）や、線刻と透孔が重複するもの（図版38-4）など、欠陥と思しき部位を含むものが多い。本遺跡出土の埴輪は、一旦、墳丘樹立のために古墳近くまで運びこまれたものの、これらの欠陥を理由に廃棄処分とされたものではないかと考えられる。二重口縁の欠損は、製作地からの運搬中に剥離した可能性が考えられるし、本来は窯場で廃棄すべきであろう穿孔途中の透かし孔を持つ個体などは、何らかの理由で一旦は集積地まで搬入されたものの、やはり最終的に破棄されたものかと思われる。これら欠陥を持つがために、本遺跡出土の埴輪は、「松橋大塚古墳の埴輪」とは成り得ず、「松橋前田遺跡の埴輪」として終わったものであろう。

以上、松橋前田遺跡は、埴輪製作地として評価できる可能性は低いものの、墳丘樹立直前の埴輪集積地として、古墳以外の場所から、古墳築造過程の一旦を知ることが出来る希少な遺跡と言える。地域史研究はもとより、埴輪生産や古墳築造総体の研究においても、様々、重要な問題を提起する遺跡と思われ、不完全なものではあるが、今回、その一端を報告できたこととすれば幸いである。

文末になりましたが、今回の報告にあたり、様々な資料を惜しみなく提供していただいた当時の調査担当者である伊藤奎二氏に御礼申し上げますとともに、資料の多くを未整理のまま報告に至り、氏のご厚意を活かしきれなかったことを御詫びいたします。 (竹中)

引用・参考文献

- 加藤一郎 2008「九州南部における埴輪の伝播と受容－唐仁大塚古墳表採資料の紹介をかねて－」【大隅申良 岡崎古墳群の研究】鹿児島大学総合研究博物館研究報告No.3 鹿児島大学総合研究博物館：pp. 233-242
- 熊本県教育委員会 1966『熊本県新産業都市指定地区 遺跡地名表（追加及び工事関係分）』昭和40年
- 熊本県教育委員会 1998『熊本県遺跡地図』
- 佐藤伸二 1970「中部九州における前期古墳発生の一側面－とくに土師器の編年に関する再検討－」【法文論叢】第26号 史学篇 熊本大学法文学会：pp. 1-21
- 杉井 健・竹中克繁 2000「前田遺跡A地点」【九州の埴輪 その変遷と地域性－壺形埴輪・円筒埴輪・形象埴輪・石製表飾－】第3回九州前方後円墳研究会資料集 九州前方後円墳研究会：p. 278
- 富樫卯三郎 1978『向野田古墳』宇土市埋蔵文化財調査報告書第2集 宇土市教育委員会
- 三島 格 1966「肥後における古墳研究－戦後の成果と問題点－」【古代文化】第17巻第3号 古代学協会：pp. 82-90

挿図出典

図60：富樫1978の第38図